

京口門だより No.129

この頃は季節の移り変わりがはっきりせず、遅れた梅雨入りのあと晴天の夏日は猛暑になり、体調を整えるが大変です。35度ちかくの気温にこれまでのやり方では通じません。エアコンなど上手く使うことが必要となります。「家一つ沈むばかりや梅雨の沼」(田村木国)

梅雨といえば湿気がつきものです。漢方医学では湿気ともに熱が加わるといっそうさまざまな病気がおこってくると考えます。例えば関節や筋肉の病気があります。膝関節痛、手足の筋肉痛などは湿気を除く朮(オケラ)を用い、熱(炎症)を治める石膏を中心にした薬を用いて治療します。越婢加朮湯は代表的薬方です。湿気がさらに多ければ防己黄耆湯という湿気をさらに強く除く薬方用います。

また、口腔内の病気も湿熱によるものと判断します。黄蓮という熱を取る薬や山梔子(クチナシ)などで湿熱を除き炎症をとります。急性のアフター性口内炎にはこの黄蓮解毒湯がよく効きます。慢性的にできる口内炎にはさらにいろいろな薬物を加えた多くの薬方があります。

皮膚病も湿熱によって起こるものも多くあります。湿疹という名前のおり湿気をもとに熱が加わって皮膚炎がおこります。ただ皮膚病は複雑な要因が絡み合っただけではうまくいきません。乾燥とか血の乾きとか瘀血(血の滞り)などの要因が加ってきます。しかし多くの場合さきの湿熱の治療が基本となり、黄蓮解毒湯や血を潤す四物湯を加えた。薬方が用いられます。特にアトピー性皮膚炎はおおくの要因がからみ、また精神心理的影響も受けやすく、なかなか簡単ではなく、個々のケースで対処しなければなりません。小児期のアトピー性皮膚炎は比較的早い経過で改善が見られますが、成人になると仕事や社会的要因も加わり、治療に長期間を要します。成人のアトピー性皮膚炎の治療には患者さんも治療する側も根気よく続け、少しずつ良くなっていくのを期待して治療を続けてほしいものです。

湿熱には他に下痢などの病気や泌尿器の病気の要因となります。このように漢方では現代医学とは異なった考えで治療を行っていることをご理解ください。

なお盆休みは8月14日から16日までとさせていただきます。

